

・大滝ダム貯水池斜面の現況等

事 項	要 点	備 考
<p>5.3 地すべり発生の地形・地質的要因</p>	<p>1) 地形的要因</p> <p>白屋地区は全般に緩斜面となっているが、この背後には地すべりの頭部に相当する滑落崖がないため、緩斜面全体が過去に地すべり運動を起こしたとは考えられない。また、今回の地すべり範囲についても明瞭な滑落崖や段差などはないので、初生的な地すべりと判断される。なお、川沿いには小規模な馬蹄形の地すべり地形が局部的に認められ、これらに対してはすでに鋼管杭工、アンカー工等の防止工が施工されている。</p> <p>2) 地質的要因</p> <p>今回実施されたボ - リングでは、白屋地区の岩盤のある深度(50m~70m以浅)まで、亀裂が発達し部分的に角礫化、細粒化、粘土化等が見られ、長い年月をかけて風化し、緩み域を形成していることが推定される。この中で特に粘土化が進んだ強風化岩に分類される箇所は複数の深度に分布し、その一部には鏡肌や条痕などが認められる。これは複数の深度に微小な変形が生じていたことを推定させる。今回の地すべりはこの緩み域内の川側斜面で、これらの変形の一部が急速に進行し発生したものである。</p> <p>3) 緩み域の分布範囲</p> <p>緩み域の分布範囲は、地質的には変形や風化・侵食を受けやすい泥質岩優勢層(SI層)の分布地域が主体で、地形的には高い標高部で緩傾斜面を形成している。その範囲は、川沿いの低い標高部では地質構造が川側へ傾斜している地域に相当し、山よりの高い標高部では地層の傾斜が緩くなり水平に変化する付近までである。</p> <p>下流側の緩み域の分布範囲は、下位緑色岩優勢層(Gs1層)が分布する尾根の手前まで、上流側では河川侵食が進行した白屋谷までと推定される。</p> <p>4) 地すべり面の分布</p> <p>今回の地すべり現象を起こしたすべり面は、川沿いの低い標高部では緩み域の下限付近で発生しており、地すべり頭部の境界や上下流の側面は泥質岩優勢層中の緩み域内に存在する。なお、これらの境界を規制する大規模な断層は今回の詳細な調査でも確認されていない。</p>	<p>「大滝ダム白屋地区亀裂現象対策検討委員会 第4回委員会資料」抜粋</p>